

無常講式と浄土宗

加 藤 豊 吉

緒 言

浄土教は来世を肯定し、我等に最高の理想と無上の樂土を啓示し、願共衆生往生安樂國を説いている。弥陀、元祖の選択し給へる「順彼仏願故」の一向専修称名念仏の恒修相統である。この専修念仏を波乱万丈なる運命のしがらみの中で信奉し、往生の素懷を遂げられたのが後鳥羽上皇である。そしてその御信仰の帰結を垂世の目的で御製せられたのが無常講式である。従って本講式は上皇の晩年に於ける御信仰理念を窺知する貴重な史料である。

平安朝末期鎌倉時代初期の日本は、源平興亡戦と政治史上の変革期で、公武両政権の対立抗争の激しい時代であった。

その時、律令的天皇親政を樹立せんとせられたのが後鳥羽上皇である。上皇は幕府の専横を憎忌し給い、叡慮を廻らし軫念を傾け天業恢弘の御雄策を講じ給いが、天運つたなく承久の乱に敗れ、大逆北条義時により隠岐に遠流せられ、星霜

十九年この浦に住まわせ給いて帰路の夢も空しく、延応元年（一二三九年）二月二日哀切悲愁の裡に崩御遊ばされたのである。誠に罹れ多き痛恨の極みであった。上皇は実に英邁な聖天子にましまし、万機を振肅し朝威宣揚に軫念を煩はし給うた。一方文武両道に達せられ、又歌聖の誉高く、文学、諸芸（刀剣、琵琶、横笛、囲碁等）に卓越せられていた。

御信仰に関しては、諸先学の幾多の論文に発表された如く御事蹟は多く、仏縁深くあらせられ、当初は法華經を誦誦し、仏典の精学、勤行、写経等仏事に精勵せられ、慈円、俊苾、聖覚、明恵等の高僧を召され、諮問、御進講の聴講も多く又、法然上人を戒師として御受戒も遊ばし、漸次機根は増大せられたと拝されるのである。

扱、上皇の浄土信仰は何時頃から胚胎したか諸資料を委に閲覧し考察するに、建久九年（一二九八年）第一回熊野行幸と推定され、爾来歳月と俱に次第に御造詣も深まり浄土に傾倒せられたのである。遠流後は称名念仏に徹し給い、散心念仏

に關する疑義を承円、聖覺、明禪等に質され、淨土教義の深奥に迫る念仏三昧の御日常であつたと拝される。誠に愧び参らすだに罹れ多い極みである。晩年に至つては御信仰の様相も凄惨な迄となり、願求淨土、弥陀本願の渴望、来迎引接、と大御心は淨土に憧憬せられ、無常講式宸筆に迄御信仰は統一、純化せられたのである。

無常講式概説

(本稿に於ては国文学的解釈は他日に譲り、専修念仏に關する考察を叙述する)

通覽し奉るに、上皇がいかに仏典を御精学になり、又外典に通じ給いしか、罹れ多きこと乍ら御學問の深さを窺知し得るのである。御引用遊ばした内外典の名辭句を縦横無尽に、御自身の思考の中に同化せられて、思ひのまま巧妙に叙述せられた本講式は、至高なる宗教文学である。

而して本講式は一般の形式を打破し、特種な自由形態を整えられている。

「無_二次第_一無_二法則_一只念_レ無常、唱_二弥陀名_一無_二日時_一無_二道場_一、閑居曉天 旅宿草枕」

冒頭のこの短い偈文に始まる本講式は、三段に分け講説せられている。

初段は専念念仏の表白である。人の世の無常を説き、厭離穢

土欣求淨土の念を惹起せしめる無常觀の説述、次いで喩論を古事に抽導し給い、六十路を迎え老の不安と焦燥に煩悶し乍ら

「厭_二五道六道苦_一可_レ欣者安養之淨刹、生_二前仏後仏之間_一可_レ憑者弥陀之悲願也、只唱_二弥陀名_一可_レ欣_二蓮上_一也 故 東 黛柵不_レ登之先急可_レ急者念仏功」と称名念仏を力説せられ、大御心は願生淨土に憧憬し給うのである。

中段に於ては仏教の哲理、三世を貫らく拔大原則、三法印中、諸行無常印、即、万有流転の大法則に触れ、就中愛別離苦、哀切の実相を巧妙に名文を以て宸筆せられている。

「举世如_二浮蟬_一一朝生夕死別者幾許哉 或昨日已埋拭_二涙墓之下_一者 或今夜欲_レ送泣_二別棺前_一之人 凡無_レ墓者人始中終如_レ幻者一期遇程也 三界無常也、自_レ古未聞_レ有萬歲人身」と三界の無常と人生の儚なさを述懐せられ、次で凄慘眼を覆う慘慄極まる光景の描写と続き、白楽天詩集より抜粋活用後、

「一切有為法如_レ夢幻泡影、如_レ露、亦如_レ電、応作_二如是觀_一」と永遠、無限なる時空に於て人生の余りにも短拙、刹那なるを觀想せられての述懐である。

終段では、御配流後、時は流れて幾春秋、總ての望を断たれ深い諦觀に発し給うた、鋭い人生への御批判と、高き彼岸への思慕と交鎖し、やがて来迎引接への深刻な悲願に浸潤し

給う大御心を追想し奉る時、悲涙滂陀として頬を伝わるを禁じ得ない。

「契而尚可_レ契者菩薩聖衆之友、憑尚可_レ憑者、弥陀本誓之助也」と勝友として菩薩及極樂界会清淨大海衆への思慕と本願渴仰の軫念が窺える。そして再度「欣_三九品之迎_二唱_三弥陀之名号_二」と称名念仏を執拗に勧進せられるのである。又本講式を拝誦し奉るに、無常観叙述の間及、各段の結びに必ず六字の名号を記述せられていることである。これは何を意味するのであるうか、明らかに、称名念仏の相続を銘記せられているのである。

そして最後に「此依_三諸功德_二願命終時於_二見_三無量寿仏_二無辺功德_三身_二我及余信者既見彼仏_二已_一願得_三離垢眼_二往生安樂国_一」と結ばれている。この一節は永観も往生講式に引文しているがその典拠は堅慧の宝性論である。

考 証

偈、本講式に於て、専修念仏義を明示する文句は次の通りである。

冒頭の偈文「唱_三弥陀名_二」初段の「只唱_三弥陀名_二可_レ欣_三蓮上也_二」終段の「欣_三九品之迎_二唱_三弥陀名号_二」である。

唱は口に出してとなえることで、称は口になえることを云う。意味は共通であるが、称には賛嘆の意も含まれ、思

念、憶念ではなく、生体の発声器官により発音を必須とする。故に称名念仏は、仏名を声に出して称えることで、之が専修念仏の本義である。その音波が空気伝導により聴覚に達する時、高声念仏となる。宗祖は「念仏は最も称名を本願とすれば、地体高声なる可し。我が耳に聞ゆる程を高声の分とする也」と言っている。

次に初段に曰く

「只唱_三弥陀名号_二可_レ欣_三蓮上_二也_一」と仰せられている。

「只唱_三弥陀名号_二」は専修念仏独特の教判である。この「只」に重要な意味があり、この「只」は一枚起請文の「只」一向に念仏すべし」の只と全く同じ意味で、他に何も無いと云うことである。即、真如、空、観念、賛嘆等総て無いと解釈すべしである。元祖の選択本願念仏義に於て余善諸行は弥陀本願の生因に非ずとして廃捨し、一向専修名念仏こそ正しく弥陀の本願であり、衆生往生の正定業と決めつけて勧進せられた。されば称名念仏の弘通、勧進は、元祖出世の本懐である。上皇は元祖のこの念仏思想を本講式に講説し給い、称名念仏を強調せられている。於是

観無量寿經散善義の一節

「仏告阿難、汝好持是語、持是語者即是持無量寿仏名」と、更に元祖の常に仰せられる詞「名号を聞くと云とも、信ぜずは聞かざるが如し、たとえ信ずと云うとも、唱えずば聞

けざるが如し。只、常に念仏す可し」を併せ、思考する時、念仏の次元は、時空を超越して、三尊者俱に相等しいのである。

上皇は浄土宗に実に尊き御事績を遺功あらせられた。

即ち称名念仏の最勝絶対性を信奉になり、実践躬行の後、得られた宗教的体験に基づき、人間の窮極に於て憑む可きは、万徳所帰、超勝独妙なる専修念仏である事実を御遺戒あらせられ、不朽の聖典、無常講式を御垂世し給うたことである。

浄土願生の軫念がひたむきに募れば募る程、寄る辺なき身は、老苦と病悩に苛なまれ、不安は焦燥を招き、これが交錯し、哀愁をそそり、やがて慟哭となり、慟哭の中に一条の光明を見出し、決然として悟り得た帰決を筆に託す垂世への衝動にかられ、御宸筆遊ばされたと遙想し奉る。

出離の道を求め給えるお念仏は、勝田山麓の木の間に残れ、切実な人生観、深刻なる無常観が魂のふるさと極楽浄土への絶叫であり、弥陀本願喝望の哀願であつたのである。

上皇は壮大な体系と深甚なる教理を展開した南都六宗の顯学も捨て、最澄以来の伝灯と権勢を誇示した北嶺台密の教学も抛ち、深淵なる構想と幽玄な真言教論を継承した。高野東密の教義も軫念に添わず。乱世の時相に時機相応なる法然上人の教説、一向専修称名念仏を選択し給い、称名念仏に依り

往生の素懷を遂げ給うた正しく専修念仏の大先徳におわしたのである。

元来浄土宗は上皇に対し奉り余りにも冷酷である。中皇は上述の如く浄土宗に披群の御事績を遺され、至尊の御身を以て他の総ての信仰を捨て、最後には只一途に宗祖の専修念仏を信奉せられ、浄土教に殉教あらせ給うたと云つても過言ではない。

然るに、専修念仏を宗旨する浄土宗がその遺徳の顯彰はるか、無常講式さえ取り挙げていない。誠に遺憾至極である。実に無常講式こそ浄土宗に於ける珠玉の聖典である。

念仏停止、宗祖遠流の院宣が強烈なイメージとなり、法敵の如く錯覚し、因襲となり残存継承した結果である。然し、これは大変な誤解である。上皇の軫念には専修念仏抹殺の叡慮はなく、念仏停止は、聖道門への方便であり青年期における血氣の一時的激情に因るものであつた。後年停止した禁を御自ら破り、称名念仏に浸潤し、往生の素懷を遂げ給うたのである。我等はこの事実を重視しなければならぬ。上皇は人間が、極限の状態に陥った時憑むは弥陀一尊であり、出離の要道は称名念仏の外に無いことを、換言すれば、称名念仏は万行に勝る絶対的肯定業であると云うことを、証誠遊ばされたのである。

語 結

以上無常講式の概略を述べ、専修念仏に関する私的考証を叙述した。

本講式に説述された上皇の御信仰は、その文章を解しても、他の念仏と比較検討しても、明らかに専修念仏であることに間違いはない。宗門に史家多士濟々、この事実を直視し、宗史に正しく位置付けて銘記し、後進に伝承し、又全僧に真実を認識せしめることが、学究に課せられた責務である。

無常講式はその写本が洛北、仁和寺の宝蔵より大正七年和田英松博士により発見され、国宝に指定されているが、余り流布されていない。三祖紀主禪師の高足、望西棲了恵が弘安六年（一二八三年）自著、知恩伝巻下に終段の一節を引用しているが、その後、真宗の存覚が法語に引用し、又蓮如も中段の名句を白骨御文に引文し、真宗では今日迄活用している。然しこれは誠に残念な事である。無常講式には浄土宗の念仏思想のみを講説せられ、真宗の念仏義には抵触されていない。従って浄土宗のものである。故に浄土宗挙って奉戴謹誦し、臨場法話に又待機説法に、念仏弘通と俱に弘く活用しなければならぬのである。

無常講式の宣揚、流布は、愛山護法に連鎖し、万世不朽の

法門に燦然たる光芒を添えることを確信するものである。

昭和六十四年（一九八九年）は後鳥羽上皇崩御ましまして七百五十年になる。

奉賛会に於ては、痛恨の往時を回顧し、御聖徳を景仰し奉り、七百五十年大聖忌を一本挙げて謹修し、以て微忱を献げ奉らんと念願し、準備を進めている。宗門各位には何卒趣意を理解、御賛同の上、協力支援賜わん事を懇望する次第である。

△キーワード▽ 無常講式、浄土宗、専修念仏

（総本山智恩院伝導隊理事）

『印度学仏教学研究』バックナンバーのお知らせ

本誌のバックナンバーのうち左記の号は在庫切れとなっております。

- 一一一(1)、一一二(2)、三一一(5)、五一一(9)、五一一(10)、
- 六一(11)、六一(12)、七一(13)、七一(14)、八一(15)、
- 八二(16)、九一一(17)、九二(18)、十一(19)、十一(20)、
- 十四(21)、三十三(22)

これら以外は在庫がありますが、在庫僅少のものもありますのでご入用のむきはお問い合わせ下さい。

日本印度学仏教学会